

2018年10月28日

福音書からのメッセージ

悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

(マタイによる福音書 5章 4節)

毎年、諸聖徒日の礼拝では、山上の説教の冒頭部分を読まれます。ガリラヤで伝道を開始されたイエス様は四人の漁師を弟子にし、そしておびただしい病人をいやしていきます。そのイエス様の元には、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来て、従ったとあります。

イエス様はこの頃、ガリラヤ湖のほとりのカファルナウムを中心に活動をされていました。そこから直線距離で約 120 km あるエルサレムまでそのうわさが広まっていたということになります。

たとえば京都市から 120 km離れた場所という、北の方では福井市。また西に行くと兵庫県の相生市ぐらいでしょうか。しかしこれは、2000年前のユダヤの話です。インターネットもなければテレビ、ラジオもない。そんな時代に一人の大工のせがれを見るために、遠くからやってくる。そこには理由があったはずです。

なぜ人々は、イエス様の元に遠く離れた場所から、歩いて向かったのでしょうか。何日もかけて、足を痛め、お腹を空かせ、のどの渇きを我慢しながら、それでもイエス様の元に行こう、そう思った原動力は何なのでしょう。

「悲しむ人々は幸いである」。そう言って、今、打ちひしがれている人を抱きかかえてくれる、涙をぬぐってくれる、一緒に歩いてくれる、そのイエス様の姿を知ったから、自分もそうしてほしい、イエス様の元に行きたい、そう思ったのではないのでしょうか。

イエス様は今でも、悲しみの中から逃れ



られない、暗闇の中でもがいている、社会に居場所がない、そのような人々に無条件で

手を伸ばし、「あなたはそのままがいい。そのまま幸いなんだ」と語ってくださいます。そのイエス様の姿が、すべての原点なのです。その言葉を聞きに、みんなやってきた。その手のぬくもりに触れるために、やって来たのです。そしてイエス様は今、十字架での死と復活を経て、わたしたちの元にやって来てくださるのです。「あなたたちは幸いだ、あなたたちは慰められる」。それがわたしたちに与えられた約束なのです。

諸聖徒日の礼拝では、わたしたちよりほんの少し先に、天の御国へと、神さまのみもとへと旅立った愛するお一人お一人をおぼえ、お祈りをしています。イエス様の今日の言葉は、悲しみが癒えない人の心を慰め、死への不安におびえる人の心を勇気づけ、天に召された人々の魂を憩わせませす。

悲しみも、苦しみも、痛みも、決して一人で背負わせたりはしない。そのためにイエス様は来てくださいました。そして死に向こう側にある希望を信じて、お祈りを続けていきたいと思ひます。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>